

1 事業名 **さんべ夢ステージ ～君こそが、未来のリーダーだ！～**

2 必要性

子ども・若者育成支援推進大綱「子ども・若者ビジョン」（平成22年7月）には、「子ども・若者が、社会とのかかわりを自覚しつつ、自尊感情や自己肯定感をはぐくみ、自立した自己を確立するとともに、自らの力で未来の社会をよりよいものに変えていく力を身につけることができるよう支援します。」とある。また、この大綱の重点課題の中から抜粋すると「様々な体験や他者との交流を積み重ねることにより、自立した個人として必要な知識・能力・社会性やリーダーシップなどをはぐくみます。」とある。

このように若者（青年）が様々な体験を通して、リーダーとしての資質を高めていくことができるよう、また、社会形成への参画や意見表明の機会が与えられるよう、国・地方公共団体・民間団体をはじめ、社会全体で支援することがより一層求められている。

本事業は、様々な体験や交流を通して「リーダーシップ」を学ぶとともに、社会形成に参画するために、「意思決定」および「情報発信」のできる青年の育成を目指しており、青少年教育の推進拠点としての国立青少年教育施設が先進的かつ継続的に取り組むべき事業である。

3 趣 旨

主体的に社会に参画しようとする青年を対象に、自己肯定感を持った自立的人間として社会に参画できる態度を形成することをねらいとしている。事業の企画・運営を通してリーダーシップを身につけ、将来のリーダーとなるための体験を通じた学びを提供する事業である。「リーダーシップ」と「チームワーク」をキーワードに、企画・運営の様々な場面で合意形成・問題解決を繰り返す中で、対人関係能力などリーダーとして必要な資質の向上と、意思決定・情報発信のスキルアップを図ることをねらいとしている。

4 後 援

島根県教育委員会、島根大学、島根県立大学、松江工業高等専門学校

5 期 日

①企画力・運営力アップセミナー編

平成23年 7月1日（金） ～ 7月3日（日）（2泊3日）

②想いを形にする編

その1 平成23年 8月20日（土） ～ 8月21日（日）（1泊2日）

（大学の日程）平成23年 9月9日（金）

（大学の日程）平成23年 9月12日（月）

その2 平成23年 9月13日（火） ～ 9月14日（水）（1泊2日）

その3 平成23年 10月14日（金） ～ 10月16日（日）（2泊3日）

③夢が現実になる本番編

平成23年 10月21日（金） ～ 10月23日（日）（2泊3日）

6 参加者

(1)募集対象・人数 大学生（短期・専門学校を含む）、社会人

①企画力・運営力アップセミナー編 20名

- ②想いを形にする編 (その1~その3) 60名 (延べ)
- ③夢が現実になる本番編 30名

(2)参加人数

- ①企画力・運営力アップセミナー編 19名
- ②想いを形にする編 (その1~その3、大学での日程) 77名 (延べ)
- ③夢が現実になる本番編 45名
- 事業全体を通しての参加者実数 62名

(3)参加者分析

①企画力・運営力アップセミナー編 (①編とする)

島根大学教育学部の学生が13名、島根県立大学出雲キャンパスの学生5名と、社会人1名の参加(島根県新任教職員研修会のプログラムに認定されたことによる)があり、島根県内の青年によるメンバー構成となった。平成21年度からの課題となっていた1・2回生の参加者が減っていることについては、今回9名の1回生、6名の2回生の参加があり、県内の各大学への効果的な広報(後述)や「ボランティア活動入門セミナー」等の教育事業と連携したことで、大幅に参加人数が増えた。島根県立大学出雲キャンパスの学生は全員初参加であった。

参加目的(表1)については、過去参加経験のある学生は、「視野を広げる、過去の企画との比較と向上」等をあげ、初めての参加者は、「企画力・実践力の向上、コミュニケーション能力の向上」をあげている。

②想いを形にする編 (②編とする)

島根大学の学生、島根県立大学松江キャンパスの学生及び島根県立大学出雲キャンパスの学生の参加となった。1回生の参加は延べ22名、2回生の参加は延べ29名となり、継続して多数の1,2回生の参加が見られた。また、3・4回生は過去の参加者がほとんどで、経験もあり良きロールモデルとなった。

③夢が現実になる本番編 (③編とする)

これまで参加した青年による声かけや、法人ボランティアに参加を呼びかけたところ、「さんべ祭」当日は45名の青年の参加があった。1回生の参加者は7名、2回生の参加者は20名と、半数以上を1・2回生が占めることとなった。

参加理由として「内容に興味があった」が多いが、「友人に誘われて」をあげた参加者も多かった。(表1)

参加理由(抜粋・複数回答あり)	①編(19名)	②編(77名)	③編(45名)
内容に興味があった	13	51	29
友人・知人に誘われて	9	26	27
交友を広げるため	6	22	18
自己啓発のため	8	28	17



「夢ステージ」本番 笑顔の参加者

(4)参加者地域 島根県61名、鳥取県1名

7 参加経費

- ①企画力・運営力アップセミナー編 3,100円
- ②想いを形にする編 2,000円(その1, その2)、3,000円(その3)
- ③夢が現実になる本番編 1,500円

8 講師

- ①企画力・運営力アップセミナー編 田中 玄洋 氏
(NPO 法人学生人材バンク代表理事)

9 事業の内容

(1) 事業の特色

本事業は、3編シリーズとなっている。①編は、企画・運営についての学びを活かし、企画の骨格を作成する過程。②編は、企画を具体化・実現化していく過程。③編は、実際に企画を発表する過程になっており、長期的に様々な体験や他者との交流、発信ができる場を設定している。

これらの活動は参加者主体で行うことでモチベーションを高めるとともに、青年たちの可能性や創造力を最大限発揮できる形にしている。また、体験活動普及啓発事業「さんべ祭」をこの事業の発表の場とすることで、活動を通して来場者と直接ふれ合い、市民性・社会性を身につけ地域社会へ積極的に参画することができる。また、多数の青年が「さんべ祭」に参加することで地域コミュニティが活性化し、青年にとっても、地域にとっても実りの多い事業となっている。

(2) 企画のポイント

①編で企画・運営における重要なポイントを講義から理解し、それを活かしながら実際に「意思決定」や「意見表明」の必要な場面を体験する。②編からの、企画・準備する過程において、コミュニケーション能力・合意形成能力・問題解決能力等を必要とする場面を体験する。また、すべての場面で当施設職員は、必要とされる時のみサポート役（自立尊重的指導）となることで、青年たちが主体的に企画創りに取り組めるようにする。そして、様々な体験を通して「リーダーシップ」の本質についての学びを深め、今後自分の身の回りで発揮できるようにする。

(3) 広報のポイント

島根県内の大学において、大学生がボランティア活動へ積極的に取り組む環境作りを推進する動きが高まっている。(島根大学：1000時間体験学修・ビビットカード、島根県立大学：学生ボランティアマイレージ制度等) それぞれの大学では、ボランティアを募集している団体に説明の機会を与えている。その機会に、当施設のボランティア活動について説明をした。特に、年間を通しての当施設のボランティア活動の予定を、プリント配布により紹介することで、学生に年間のボランティア活動について見通しを持ってもらうことができた。また、説明会には先輩ボランティアの協力を得て、ボランティア活動の体験を直接語ってもらった。こうした説明の機会を有効に活用して、大学生に対し、当施設のボランティア活動の浸透を図った。

①企画力・運営力アップセミナー編

平成22年度の参加者(40)、ボランティア活動入門セミナー参加者(50)、島根県内の大学(2)・短期大学(2)・専門学校(18)及び広島県内の大学(9)にも幅広く募集した。

②想いを形にする編

「①編」の参加者が、仲間に広報をして、新たなメンバーを集めることを基本とした。島根大学教育学部附属支援センターを中心に、島根大学の学生支援課や島根県立大学にも案内や資料を郵送し幅広く募集した。

③夢が現実になる本番編

「②編」の参加者が、「さんべ祭」本番に必要なスタッフを集めるため、参加者各自の人脈を活かしながら広報活動を展開していった。その結果、運営に必要なスタッフを集めることができた。

(4) 日 程

「さんべ夢ステージ」15 日間のプログラムの流れ

表 2

「さんべ夢ステージ」の流れ		参加者数	プログラムの主な内容
① 企画力・運営力アップセミナー編 (7/1～7/3 2泊3日)		19名	講師に学生人材バンク代表理事の田中玄洋氏を招き、企画・運営の基礎知識や注意点を学んだ。3日目はグループに分かれて「さんべ祭」での企画を考えた。「今、さんべが動く!」というテーマを決め、全員で動き、来場者に感動してもらう「さんべ祭」にすることを確認した。
② 想いを形にする編	(その1) (8/20～8/21 1泊2日)	19名	仲間集めのためのたき火料理やレクリエーションゲームなどの楽しいプログラムと、前回考えた企画を練る話し合いを行った。
	(その2…大学) (9/9、9/12 2日)	23名	当施設に集まるのは大変なため、島根大学や島根県立大学で企画の話し合いの場を設定した。
	(その2) (9/13～9/14 1泊2日)	21名	練り上がった企画を当施設職員にプレゼンテーションした。職員より助言を得て、ここからいよいよ企画の実現に向けて具体的な活動を開始することになった。
	(その3) (10/14～10/16 2泊3日)	14名	本番一週間前。実際に企画を実施する会場で試行したり、掲示物や来場者に渡すプリント類の作成を行ったりした。
③ 夢が現実になる本番編 (10/21～10/23 2泊3日)		45名	「さんべ祭」本番。青年たちが考えた企画を来場者(4439人)に思う存分楽しんでいただいた。

(5) 運営のポイント

理論から実践までを体験できる構成

青年(大学生)が企画・実践する活動を、これまでに数多く手がけてきた講師を招聘した。多くの具体例を挙げ、参加者に企画するということがイメージしやすいような講義内容にいただいた。講義の後は、小グループに分かれて企画のアクションプランを作成し、企画創りの理論から実践までを体験できる構成とした。また、参加者のモチベーションを第一に考え、参加者の状況を十分に確認しながら、講師と共に活動を検討し、その状況に合った柔軟なプログラム展開ができるようにした。

経験の差をうめる話し合いへの環境作り

職員はリーダーに必要なことを伝える以外は支援者として関わることを基本的なスタンスとした。また、「①編」で出てきた企画の幹になる部分と、新たな参加者の想いが上手く融合するように配慮した。特に、初参加の1・2回生が意見を言いやすい環境作りをリーダーと相談しながら進めた。

参加者ニーズの理解と施設外の自主活動の支援

青年たちのモチベーションを維持するために所外となる大学での話し合いの場を2度設定し、担当職員が大学に出向いて相談に乗った。さらに青年たちは企画を練る話し合いを大学で自主的に何度も行った。

本事業に参加する青年の目的が「自己啓発」「スキルアップ」であることはアンケートやふりかえり用紙からうかがえるが、初めての参加者にとっては他の参加者との交流も大きな目的になっている。このような参加者意識の違いをオープニングで把握し、プログラム中の満足感を、会話や表情等から読み取ることで把握し、参加者の精神的な状況を十分確認しながら展開した。

(6) 安全管理のポイント

朝・夕のつどいの後や全員での話し合いの際に健康状態を確認するとともに、随所で休憩をとりゆとりのある活動になるよう心がけた。また、リーダーにも健康面について配慮するよう伝えた。

「③編」では、「さんべ祭」参加者に幼い子どももおり、青年たちには安全面での配慮を意識するよう指導した。具体的には、「紙ヒコーキ班」では刃物の使用を伴うため、班員が事前に製作をして安全管理について認識をもたせた。「スタンプラリー班」ではゲーム中にけがが予測されるものもあり、来場者の様子をしっかりと見るよう意識させた。

(7)実施状況

①企画力・運営力アップセミナー編

講師にNPO法人学生人材バンク代表理事田中玄洋氏を招き、企画・運営に関する基本的な事柄から実際に企画を実現するための重要なポイントについて、理論を体験的に学べるように様々なアクティビティを通して指導していただいた。その結果、参加者の青年たちは、グループに分かれてのアクションプランを実際に作成するときに、講師から指導された「集団で企画を進めていくコツ」や「発信の良い方法」などの講義内容を意識しながら活動し、全体テーマや企画の素案を決定した。



熱く語る田中玄洋講師



発想を鍛えるグループワーク



参加者全員の笑顔

②想いを形にする編

参加者は「①編」の決定内容や参加者の想いを引き継ぎながら全体テーマ「今、さんべが動く！」に即して、家族や仲間との絆やつながりを表現できるような企画として、4つのグループ（表3）に分かれて活動した。

表3

「さんべ夢ステージ」青年たちの企画

企画の班と名称	企画内容
ステージ班 演目：「ボクとみんなとつながる心」	青春学園ものの劇・ダンスと、ステージの司会進行を行う。
ハガキ班 「手作りのハガキ屋さん」	紙すき体験を通してエコの心を感じながら、想いを形にしたハガキを作る。 お世話になっている人に手作りのハガキを送る。
紙ヒコーキ班 「飛行機王に君はなる！！」	牛乳パック、ペットボトル、画用紙などを使ってオリジナルの飛行機を作る。親子で工夫して自作の飛行機を飛ばして、飛距離を競う。
スタンプラリー班 「さんべフレンドパーク～スタンプGetだぜ！！」	親子や友達と協力し、8種類のゲームをクリアしてスタンプを集めると、オリジナル写真カードができていく。



仲間を集めるためのプログラム体験



ヒコーキを飛ばしてプレゼン



紙すきの準備

③夢が現実になる本番編

企画の段階から、「この企画で『さんべ祭』来場者に何を伝えたいのか」を原点に据え、ぶれることなく企画を進めていくことができた。全体テーマに即し「つながり」や「感動」についての発想を結集し、充実した内容の企画が出来上がった。数多くの「さんべ祭」来場者にも企画を楽しんでもらえ青年たちは達成感を味わうことができた。



気持ちをつなぐツナゲンジャー



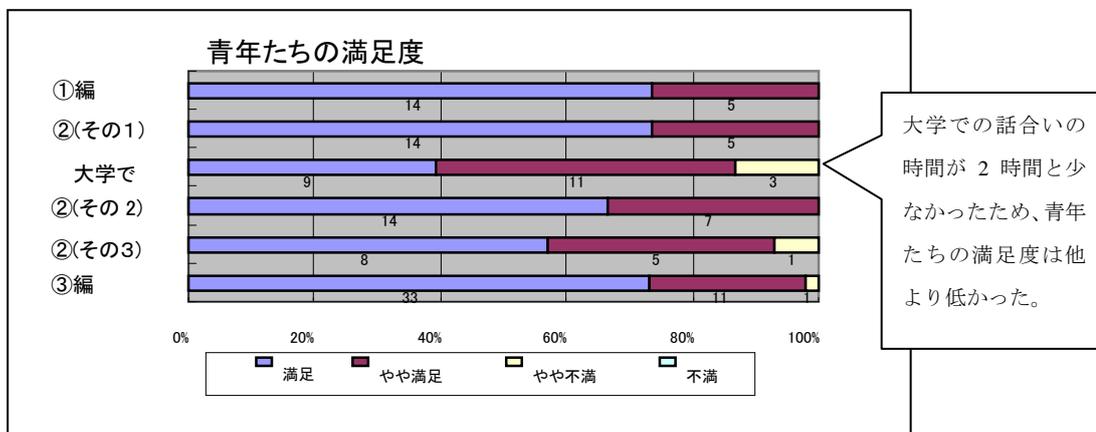
幼児にも丁寧に説明



感動のフィナーレ

(8) アンケートの満足度・ふりかえりの主な記述

図 1



①企画力・運営力アップセミナー編

- ・講義を聴いて何が企画なのかということ学んだ後で、実践という形をとってやりやすかった。
- ・企画力・運営力を向上するために、自身で考える取り組みが多くあったので良かった。
- ・企画をする上での「肝」となる力の中で「段取り」が一番大切だということを知った。
- ・企画の発表の時、他の人からたくさん意見や指摘をもらい、その後、自分の意見を他の班に言うのが怖くなった。
- ・企画については十分だったが、運営に関する学びが少なく、やや不満だった。

②想いを形にする編

- ・人の意見を聞いて考え方をより深めることができるようになった。
- ・大学のグループワークと違い、あまり関わったことのない人と意見交換をし、様々な意見があることがわかった。
- ・一つのことに時間を割いて考えてみるのも良い。職場ではさっと決められてしまう場合が多く、熟考する暇がない。
- ・話合いでの自分の視野の狭さを感じた。
- ・初参加の人に説明をすることはとても難しい。準備の必要性を感じました。
- ・一つのことを伝えるために、何通りもの話し方を考え、その中で最適なものを選ぶ癖をつけられた。
- ・全体会で各企画に対して質疑応答をしたり、案出ししたりする時間があまりなかった。
- ・プレゼンをしたことによって、一人ひとりが何をすべきかがよくわかり意欲が高まった。

- ・相手に伝えるということは、話し合いでもプレゼンでも本当に難しいです。

③夢が現実になる本番編

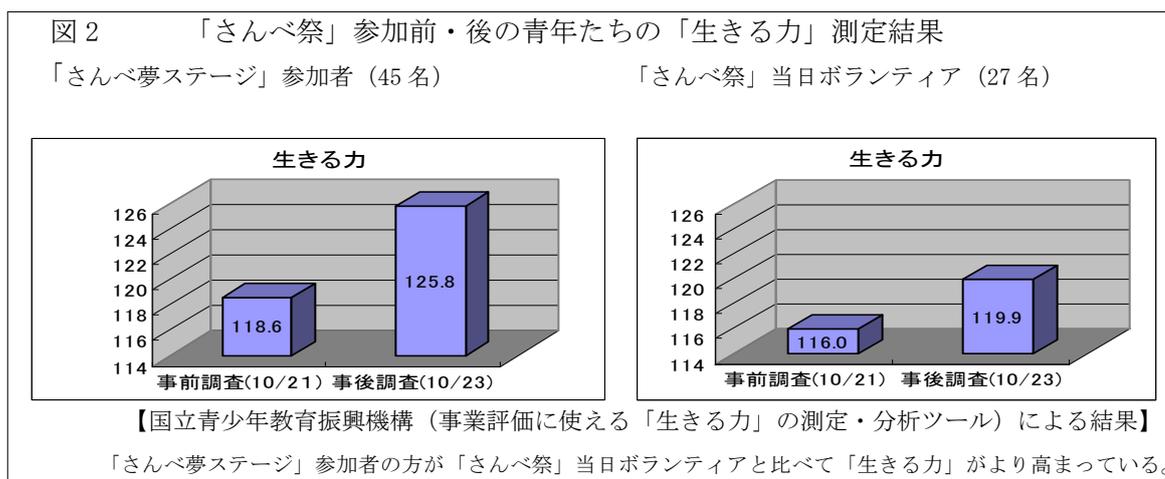
- ・参加するたびに発表の機会があるため、話す力がついたと思う。
- ・最後にちょっと泣けてきました。それくらいやりがいのある事業で、学びも多いものだと思います。
- ・今まで人見知りであり人と話せませんでした。運営のために協力して、創りあげるためにいろいろな人と話せるようになった。
- ・劇の練習がとても印象に残っていて、仲間と本音で言い合う信頼関係が築けた。
- ・人と協力して大きなことをする力がどんどん養われていると思う。
- ・初めて劇に参加し、どうしたら相手に伝えたいメッセージを届けることができるか、表現力を身につけられたと思う。安全に子どもたちと関わることがとても重要だった。
- ・自分の中でリーダーの意識が高まったかはわからないけど、周りのみんなのリーダー度は高まったように思う。
- ・周りの班の人や状況をとても気にするようになったのは私にとって奇跡といっても過言ではありません。ひとりでは何もできないということが本当によくわかりました。
- ・実際に企画を実施するのに、物事の順序とか優先順位とかが少し見えるようになった。
- ・企画を練り、人を動かす難しさやみんなと一つのを創りあげる喜びを知った。
- ・今までの自分では絶対にしないようなことをしてしまうことが増えました。
- ・全体のことを見ようとする意識が芽生えたことが一歩進んだところ。
- ・相手の心の動きを感じ取り、自分本位ではなく、フォローするように努めることができた。

10 成果と今後の課題

<成果>

「生きる力」増加の確認

- ・自ら創り上げた企画を運営・実現できる場を経験すると、「生きる力」が増加する。(図2)
「さんべ夢ステージ」を通してさんべ祭に関わった青年たちは、「さんべ祭当日ボランティア」と比較して「生きる力」が増加することがわかる。



- ・自らが情報を発信できるプログラムを経験すると、「生きる力」が増加するといえる。(表3)
①編～③編で「生きる力」を測定(図2と同様の調査)すると、②編(その2)と③本番編が数値の伸びが大きいことがわかる(表3)。そのプログラム内容として、②編(その2)では職員へのプレゼンテーションを行ったこと、③編では「さんべ祭」の来場者と直接ふれ合いがあったことがあ

げられる。(表 4)

	①編	②編(その1)	②編(その2)	②編(その3)	③編
事前調査	112.1	119.3	115.0	118.0	118.6
事後調査	114.2	121.8	120.7	121.8	125.8
増加ポイント	2.1	2.5	5.7	3.8	7.2

リーダーとしてのスキル獲得への体験

- ・企画や準備の話合いの中で、コミュニケーション能力・合意形成能力・問題解決能力を必要とする場面を数多く体験する事ができた。
- ・特に大学 1・2 回生にとっては十分な話合い活動の中で、他人の意見を聞きながら多角的にものごとを見る力を養う場となった。
- ・情報共有のために青年たちはメーリングリストやインターネットのホームページに掲示板を作成して、リアルタイムで各大学のメンバーに情報を伝達するよう工夫した。
- ・1・2 回生が参加しやすく、意見を言いやすい少人数でのグループワークの形態を作ることができた。グループ内の役割も 1・2 回生がリーダーを務め、3・4 回生がサポートする形が自然と出来上がった。
- ・職員が必要なときのみ助言を与えるサポート的な役割（自立尊重的指導）に徹することで、青年たちは主体的に「さんべ祭」に向けての企画創りや、実現に向けての組織作りなどを行うことができた。

次世代のリーダー育成

- ・来場した母親から、「学生さんがとても親切に対応してくれて、子どももとても楽しめた」という感謝の評価（ハガキ班のアンケートより）を得ることができた。
- ・過去に「さんべ夢ステージ」に参加した青年（社会人）が 2 名参加して、後輩にアドバイスをくれた。回を重ねるごとに、継続参加者の新たな気づきにより事業がスムーズに運営されている。過年度の参加者は(表 5)のとおりである。

(表 5)

年度	H18	H19	H20	H21	H22	H23	6年間合計
参加延べ人数(名)	99	139	113	103	89	141	684
参加実数(名)	41	43	49	46	48	62	194

194 名のうち平成 22 年度末の大学の卒業生は 81 名、そのうち 43 名の進路先を追跡したところ、33 名が教職に就いている。

<課題>

経験量に応じた自立尊重的指導とのバランス

本事業は 6 年目であり、継続参加者にとっては事業の流れが定着している。近年は 1・2 回生が中心となって活動し、経験のある 3・4 回生はサポート役（ロールモデル）となって、それぞれが自己の課題を持ち、達成感を得られる事業になっている。しかし、経験者には、これまでの企画を踏襲し成功させるという達成感だけでなく、新たな発想や切り口で事業を企画・運営することができるように、職員の関わりをこれまでの関わり（自立尊重的指導）とのバランスを保ちながら、変化させていく必要がある。

連携強化のための情報発信力の育成

リーダー性の向上には青年たち自らが情報を発信し、それが肯定的に受け止められるプロセスが有効であることは、上記の調査（事業評価に使える「生きる力」の測定・分析ツール）から明らかである。

青年が自らの意思で社会形成に参画していく意欲と態度を身につけられるよう、情報を修正しながら意思決定をする場面や、企画を社会へ発信する機会を増やし、さらなるリーダー性の向上を図る必要がある。

11 普及計画・普及実績

事業内容および成果について当施設ホームページで紹介する。また、公立の青少年教育施設や大学等へ事業紹介の場を積極的に設定し、成果の普及に努める。さらに、事業報告書を作成し青少年教育施設、青少年教育関係機関等に送付し、成果の普及を図る。

(担当 小西 勝典)